

しなやかでたくましく ——金志英先生に贈る言葉——

木 宮 正 史

2018年2月末で退職した金志英先生と最初にお目にかかったのは、私が本郷の大学院情報学環に流動教員として出向していた2011年の頃ではなかったかと思う。記録が残っていないので、残念ながら正確な日付はわからない。私の長年の友人である李元徳国民大学教授の紹介で知り合った。その当時、金志英先生は米国のデラウェア大学の大学院で博士論文の執筆中であった。デラウェア大学は、国際政治学の中でも構成主義(constructivism)のメッカの一つであり、構成主義の立場から日韓関係、特に日韓の安保関係について研究しているということであった。日本語をととても流暢に操る今の金志英先生から考えると想像できないのだが、当時は日本語の運用能力が不十分であることもあり、韓国語でコミュニケーションをとっていた。私も構成主義については関心もあり、また日韓関係を研究対象としているということもあり、すぐに意気投合して議論を戦わせた記憶が残っている。

そうする内に、金志英先生は博士論文を完成させ学位を取得後、今まで研究機会のなかった日本で研究を発展させたいという思いが強くなり、日本学術振興会のポスドク特別研究員に応募し採用され、私を受け入れ教員として情報学環の外国人客員研究員となった。そして、情報学環駒場の研究室スペースを割り当てられ、そこで学際情報学府所属の大学院生たちに囲まれ楽しい2年間を過ごしたと聞いている。その後、一旦、韓国に帰りソウル大学に籍を置いたが、英語部会、PEAK国際日本文化研究コース、地域文化研究専攻の教員に応募、採用されて私たちの同僚となったわけである。私自身は、その時はまだ情報学環に籍を置いていたので、人事に一切関わることもなく、2015年4月に流動教員を終了、駒場の大学院総合文化研究科に復帰してから本格的に同僚として接することになった。

金志英先生とは、パートナーである崔亨燮さん(チェ・ヒョンソブ 現ソウル科学技術大学教授で科学技術史専攻)、そして一粒種のお嬢さん、崔池宇ちゃん(チェ・ジウ 現在11歳)と何回か食事をご一緒したことがある。今でも印象に残っているのは、先生とお嬢さんとの二人三脚での日本での生活である。時に交代で崔亨燮さんやご両親がお嬢さんの面倒を見る時もあり、その時は金志英先生が日本でひとり暮らしをしたこともあったようだが、お嬢さんを駒場の研究室に連れきては朝早くから夜遅くまで研究室で

お仕事をされていたことを思い出す。異国の地でお嬢さんと二人っきりの生活はさぞや大変だったと思う。二人の強い絆、崔亨燮さんの献身的な協力、そしてご本人の懸命な努力が、金志英先生の日本での生活を支えていたのではないか。

非常にたくましく生きていらした。ただ、そうではありながらも、とても、しなやかな生き方をしていた。ポキンと折れてしまうような、そんなたくましさではなく、ちょうど柳のようにどんなに強い風が吹いたとしてもそれに持ちこたえられる、そんなたくましさである。辛いことがなかったとは言えないだろうが、それを微塵も感じさせない明るさがあった。それは、私たち専攻メンバーには十分に伝わり、専攻の雰囲気や和やかなものにした。

私が何よりも驚いたのは、日本語運用能力の短期間での格段の進歩である。授業はほとんど英語で行われるが、もちろん、会議などは日本語で行われるわけで、日本の学会でも報告してほしいという私の要求にも見事に応えてくれた。日本語と韓国語は語彙も共通しており、文法も似ているので勉強しやすいということはあるが、それにしても、短期間での進歩には驚いた。他の教員と同様な行政的な仕事も担うようになった。

また、研究面においても、韓国における層の厚い日本研究の中でも、かなり独歩的な地位を構築しつつある。日韓の安保関係のみならず歴史問題も研究対象に組み入れ、それをアイデンティティ・ポリティクスという理論的な手法も駆使して研究しているという点である。さらに、日韓関係のみならず、日中関係、日豪関係にも研究の射程を拡大することで、比較の中で日韓関係を再検討することも可能にしている。今後、韓国や日本のみならず、世界的にも活躍することが期待される。教員としての出発点を駒場で踏み出したことが何らかの役に立ったということであれば、このうえない喜びである。

最後に、強いて心残りと言え、もし可能であったのであれば、同僚としてずっとお付き合いしたかったということくらいだろうか。そうしたチャンスがなかったわけではなく、ご本人もそれを望んでいたからである。ただ、韓国の漢陽大学において教授としての職を得て、生き生きと活躍していることを、本人からも、また他の人からも聞く。それを聞くと何か自分のことのようにうれしくなる。私自身が何かをしたわけではないが、形ばかりの「後見人」であった者として、そのように思う。どうか、お身体に気をつけて、1年に1度は駒場に帰ってきてください。そのときには「おかえりなさい」とう言葉をかけさせていただきたいと思います。